



お山つくってるの
いや、トンネルだよ

冷夏のまま秋、そして長く厳しい冬をむかえようとしている。
日一日と弱まる陽さしのひととき、子どもたちは手を赤くそめて
仲よく砂遊びをしていた。

—相内保育所で—

昭和55年 11月号

町内会と行政の果すべき役割は

快速な村づくり推進集会在十一月十六日、荻幹落着センターに村民約六十人が集まって開かれました。
村づくり村民集会是、昨年発足した「快速な村づくり協議会」(本荘雄雄会長)がこれまで調査した結果による問題点と、その解決策をみい出すために語りあおうというもので、そのテーマも「みんな健康で明るい快速な村づくりをしよう」と定め、活発な討論を行いました。

はじめに、白川治三郎村長が「真の村づくりは、自然に親しみ、自然を大切にしながらお互いの人間性を大事にすることから出発すべきである。

お互いが深いきずまで結び合い、尊重し合い、語りあひ、思いやりをもちながら家庭づくりや、村づくりをしようとする気持ちを中心の底に根づかせてこそ達成されるものだ」とあいさつしました。

それその立場から問題提起をして討論し入りました。「親切にする運動」では、簡単に出来ることで、出来ないのが「あいさつ」である。家庭の中から、あいさつ運動をすすめて、明るく楽しい家庭、村づくりをすることに努力しました。

続いて、協議会の「親切にする運動」「交通ルールを守る運動」「環境美化運動」「健康づくり運動」の四部会から意見発表があり、「清掃の日」「スポーツの日」制定など、

信号機の設置を早急に、信号機を取りつけることによつて事故防止出来るものがあるにもかかわらず、当村

には信号機が一所も設置されていない。交通ルールを勉強するためにも、信号機を取りつけてほしい。と要望がありました。

また、当村では、十六日現在で交通事故死事故ゼロ日数が「九百二日」となっている。この記録を千日、二千日へと更新するために、運転車と歩行者が協力しあいながら進めることになりました。

「環境美化の村」を宣言して以来、それぞれの団体が自主的な計画にもついで活動を続けていているが、各団体との連携に欠けている。これまでの清掃活動を併行して「毎月第三日曜日」を「清掃の日」に制定することになりました。

「スポーツの日」制定については、昨年の村づくり村民集会でも提案されており、今後の進め方については、関係機関、団体が具体的に取組んでいくことになりました。

そのほか、参加者からは、町内会組織の活動を本来的な姿にして、もっと活発にさせることが先決であるのではないか。

「スポーツの日」制定とあわせて、各地域に「スポーツ推進委員」を配置してはどうか。等行政側への要望と、村議会に対しては、村内各種委員会への村議会議員の出席が少くない。議員が率先して参加するならば、村のいろいろな問題解決ができるのではないかと、この苦言も出され、参加者の目が出席していた小倉三男村議会議員と浜田春土村議会議員へ一言に注がれる場面もありました。



村づくりは村民一人一人が力を合わせて。



「スポーツの日」と「清掃の日」制定を決めた村づくり推進集會会場

健康で明るい快適



村づくりのための町内会の果すべき役割は……山田浩二先生

このあと、「村づくりのための行政と町内会の果すべき役割」をテーマに、東奥日報社山田浩二論説副委員長の講演がありました。

その中で、

▼住民として果さなければならぬ役割はどこまでか。

また、「J」まで責任を果せるか。

▼住民運動をする中で、「九べ」につきあつた場合、だが、どうつき破るか。

▼行政サイドでは、どこまで援助すべきかを明確にしておく必要がある。

また、当村で建設計画をすすめている、コミュニティセンターについては、住民主体の生活実態に適した施設でなければならぬ、建設計画の段階から住民参加の必要がでてる。

さらに、最近の町内会は行政下請型が多いが、住民の要求をのませる町内会組織の強化を図る必要もあり、それだけに住民一人ひとりの意志の強さと責任と対応の必要があらう。と訴へられた。

講演が終わつたあと、先日行つた公民館祭りの作品の入選者に対し表彰をし、西北教育事務所、福田真弘様、村集會を閉じました。

評

西北教育事務所 村集會 福田 真弘

村民運動の中には、文章化された村民憲章と、文章化されていないが意識の中にあつて運動を進めていくという、二種類があると思う。

十年、二十年後の長期的、総合的な立場に立つて憲章をつくり、それに到達するための住民の生活信条、生活態度が村民の意識の中にあることによつて、憲章に掲げられていたことが実践され、住民自ら養われていくのである。そのためにも、村民憲章が大事故だと思つて

「スポーツの日」制定を
「環境美化運動部会」
藤 輝 枝 (太田)

「スポーツの日」制定を
前回か続いた村民体育大会も、昨年是一部参加、今年も悪天候もつてついでに流れてしまった。

市浦村は、海と山と湖に恵まれており、それぞれ風土



「環境美化運動部会」
藤 輝 枝 (太田)

環境美化に あなたの力を

当村は、環境美化の村を宣言して以来、いろいろな団体がクリーン作戦を実施していますが、同じ目的で、同じ仕事をしていないよう、互いの連絡がとれていないよう、また、村全体をみんな

に根ざした生活基盤の違いから、大会開催の期日の設定もかならずい問題がある。しかし、話しあいによつては、一定の方向が見出せるはずで、私はここに市浦村「スポーツの日」を制定することを呼びかけた。



「村づくり運動部会」
山田 義正 (相内)



「親切にする運動部会」
木村 テル子 (相内)

家庭の中から 「あいさつ運動」を

私の家は、これといったあいさつはしていませんが、子どもは学校にいくとき、そして、いよいよ、家の中で気軽にあいさつができていない理由として、大人があいさつしないからだと思う。

家庭の中で、家族みんな

死亡事故ゼロの
記録をのばそう
市浦村では十六日現在、死亡事故「ゼロ」の記録を「九傷三日」と伸ばしており、負傷事故も大幅に減少によるも

県内の交通事故件数の半数以上が若年者の暴走によるも

の。といわれていますが、交通安全市浦支部には青年部が結成され、自主的な活動が展開されています。

運転者・歩行者が、ゆずりあいの気持ちで協力し、みんなが交通安全協会の会員のつもりで事故防止につとめたい。

当村には、信号機が一つ所



「交通ルールを守る運動部会」
丁子谷 勇 (相内)

あいさつし合うことによつて、それが習慣として身につくそこから楽しい、明るい家庭や村でできるのだと思ふ。

簡単にできそう、で、できないあいさつ。村内に「あいさつ運動」を進めてみてはいかがでしょうか。

できいしようとする盛り上がり、今ひとつ欠けているようにも思うので、「毎月第三日曜日」を「清掃の日」制定してはいかがでしょうか。

漁船3隻沈没、11隻大破

沿岸漁業大打撃

途方に暮れる漁民

脇元漁港の早期復旧工事を要望

去る十月二十六日夕から二十七日朝にかけての暴風雨による高波で、脇元漁港に係留してあった漁船三隻が沈没し、さらに中破、小破した漁船は十一隻にものぼり、沿岸漁業を営む漁民の打撃が大きく、途方に暮れています。

低気圧の影響をまともに受けた当村は、二十六日夕から二十七日三十層の強風が吹き荒れ、高波が護岸堤、防波堤を乗り越え、道路や漁港内に直接たたきつける、かつてない状態となりました。

さらに勢いを増した高波は漁船をたたきつけ、竹谷右太郎さん所有の「安全丸」、村元則美さん所有の「漁栄丸」、黒川進さん所有の「黒川丸」の三隻が沈没しました。さらに、三上貞義さんの船小屋に入っていた磯舟も、船小屋を突き破って大破。船揚

げ場の十隻もひっくり返ったり、互いにぶつかり合って大破、中破するなど暴風雨、高波により被害が増大しました。また、高波は磯松地区でも激しさを加え、二十七日早朝から護岸堤と国道三十九号線を乗り越え、腰まで海水が押し寄せ住家、非住家合わせて五十戸を襲撃しました。

このため、市浦消防団が出動し、ポンプ車四台で二十七日夕方までかかって海水を吸いあげました。

脇元漁業協同組合(山田弥佐雄組合長)では、漁港の復

旧対策会議を開いて、港湾整備の強化を関係方面に陳情

要望していますが、四層以上の高波が打ち寄せるたびに脇元、磯松地区の被害が続発していることから、早急には沿岸住民からは、漁民は漁港の復旧整備と防波堤の築造が望まれています。

村でも、漁港の復旧工事を早めるよう関係機関に働きかけていますが、防波堤の築造と消波ブロックの置き方についても十分考慮する必要があります。



7～8mの高波が防波堤を越えて漁船をたたきつけた



4～5メートルの波でも防波堤を越えるようになってしまった一脇元漁港



互いにぶつかりあい、中・大破した漁船は11隻にも達した。



舟小屋は、大破し、磯舟の形はない

1,000日達成へむけて それぞれの立場で事故防止を

交通事故死亡 非常事態警報発令中

県内では、交通事故犠牲者が続発し、昨年を上回るペースとなつていますが、県警察本部は、十月十五日から北野清市本部長名で、ことし二回目の交通事故防止非常事態警報

仲間から犠牲者を出すな

交通安全青年部が結成総会

交通安全のない明るい村づくりは我々若者が責任を持ちます。

十月二十八日、基幹集落センターに村内から二十五歳以下の青年三十人が集まり、傘木警察署管内では四番目の青年部が結成されました。

県内で発生している交通事故のほとんどが、二十五歳以下の若年運転者によるもので、傘木警察署管内においても昭和四十七年から三十七名の犠牲者が出ています。そのうち二十五名までが若年運転者の暴走によるものであることから、仲間呼びかけ、青年部を結成したものです。



若い力を事故防止へ。
交通安全青年部を結成しました。

過去の災害例をみても、容器類の手入れが十分でなかつたり、取り扱い方を知らなかつたために、火災や爆発などを引き起こした例があまりです。思わぬ災害を防ぐためには、危険物の取り扱いには十分注意しましょう。

灯油などは、普通の状態では火がつきにくいのですが、霧状になったり、布切れに浸すと、たいへん火がつきやすくなります。

わたしたちは、ふだん、危険物に囲まれて暮らしている。といっても言いすぎではないくらいです。

虫剤、塗料などの引火性・可燃性の強いものが、日常生活のあらゆる場所で作られています。

最近では、石油暖房器具も新製品が売り出され、石油温風ヒーター等は「安全」といって先入観をもたれがちですが、温風によって乾いた洗たく物が落下によって火災が発生した例もありました。

冬期間は、一日中使用しなればならない暖房器具です。安全で確実を取りつけをしてください。

灯油などの危険物の取り扱いや防火についての相談は津軽北部消防事務組合（市浦分

現代の生活に一日たつても欠かれない石油は、暖房用燃料として、燃料としては、油製品として、ふだん幅広く使われています。

また、汚れと日用のベンジンははじめ、マニキュアやヘア・リキッドなどの化粧品、殺

活動を展開していくことにしています。

そして、青年部が地域住民の模範となり、安全意識の高揚に努め、交通事故のない明るい村づくりをめざしています。

役員は次のとおりです。
葛西達也、三和善之、奈良陸英、奈良良行、三浦美智男、事務局長、山田達一

● 漏れ、あふれ、飛散しないようにすること。
● 日光の直射する場所に置かないこと。

● 危険物の保管場所は常に整理、清掃に努めます。また、ストーブ台や煙突の取り付けミスによる火災の発生が多くなっています。

● 火気の近くでは絶対に取り扱わないこと。

● 灯油を貯蔵し取り扱う場合は、次の点に注意しましょう。

● 火災の発生した例

● 危険物の保管場所は常に整理、清掃に努めます。

● 漏れ、あふれ、飛散しないようにすること。

● 日光の直射する場所に置かないこと。

あなたです！ 火事を出すのも防ぐのも

つたために、火災や爆発などを引き起こした例があまりです。思わぬ災害を防ぐためには、危険物の取り扱いには十分注意しましょう。

灯油などは、普通の状態では火がつきにくいのですが、霧状になったり、布切れに浸すと、たいへん火がつきやすくなります。

わたしたちは、ふだん、危険物に囲まれて暮らしている。といっても言いすぎではないくらいです。

虫剤、塗料などの引火性・可燃性の強いものが、日常生活のあらゆる場所で作られています。

最近では、石油暖房器具も新製品が売り出され、石油温風ヒーター等は「安全」といって先入観をもたれがちですが、温風によって乾いた洗たく物が落下によって火災が発生した例もありました。

冬期間は、一日中使用しなればならない暖房器具です。安全で確実を取りつけをしてください。

灯油などの危険物の取り扱いや防火についての相談は津軽北部消防事務組合（市浦分

電動式車イスをプレゼント

障害を克服しがんばる

社会福祉法人朝日新聞東京厚生文化事業団(後藤泰夫理事長)は、身障者の社会復帰に役立ててもらおうと、県内の重度身障者五人に電動車イスをプレゼントすることを決め、十一月八日青森市野尻の「ねむのき会館」で贈呈式を行いました。

同事業団では、昭和四十八年から身障者の生活と活動の充実に願って、電動車イスを贈り続けており、これまでに全国で千二十六台、県内に十台を贈っています。

今回は、昨年、朝日新聞創刊百周年を記念し、東日本の各地に百台を贈った際、申請者が多かった本県を選び、県障害福祉課と各地の福祉事務所が贈せんとした高坂勝志君ら五人に贈ったものです。

電動車イスを贈られた五人を代表して、高坂勝志君が感謝の気持ちで次のように述べました。

「私たちは身体障害者というハンディキャップを背負っていますが、みなそれぞれ社会の一員として尊重され、各関係機関、団体から医療、機能回復訓練、日常生活等にも手厚い指導を受けてまいりま

した。

しかし、重度身体障害者の身となり、歩けなくなってしまったときは、自分だけがこの世から取り残されていくような孤独感におそわれたものですが、それにもまして両親をはじめ家族は重い負担を背負いながら、暗い毎日を送ってきたことを思うとき、くじけたいいけない、必要があった

てこの世に生きてきたのだ、と自分に言い聞かせながら今日まで過してきました。

考えてみますと、私たちが身障者みずからが、進んでその障害を克服し、それを乗り越えるための努力と心構えを強くして、私たちができる社会活動に参加することで、思うようになったのです。

そんなある日、朝日新聞社

から電動式車イス贈呈の通知があったのでした。私は、車イスに乗って歩き回れることはいうまでもありませんが、その助けまじの心が私を大きくとらえたのです。

今日、この日を契機に、同じハンディを背負う仲間のみなさんともども、たがいに助け合ってみずからの福祉を高め、お世話いただいた多くのかたがたのために萬分の一なりともご恩返しができるようにしたいと思います。

季節は冬の彩を濃くしてありますが、小春日和の陽気な一日を車イスの銀輪を輝やかにしながらアスファルトの道を存分に走ってみたいと思います。」



県内5人の身障者に電動式車イスが贈られました



プレゼントされた車イスにさっそく試乗する富坂君(青森市の「ねむのき会館」)

米寿おめでどう 葛西さん

郵政省では、簡易保険事業の一つとして「こしも米寿」を迎えた人たちに記念品を贈りました。

「去年までは手紙を書いて、郵便局へ出すに行っていたのだが、車の交通量が多くてネエ。あまり出て歩かず、老人の立場から交通事故防止に協力していただきますよ。」とユエラスに語ってくれました。

本村では相田地区の泰ミヤさんと磯松地区の葛西そよさんがめでたく米寿を迎え、三和孝徳相内郵便局長から記念品が多治見焼きの湯のみ茶わんが手渡されました。「米寿」を迎えた泰さんと葛西さんはともに明治二十五年生れで八十八歳。

「三年前までは、高血圧に悩まされたが、現在は身体の調子が非常によ。食事にもしっかり気がなく、カレー、サラダなどを好んで食べているそうだ。

時々、畑仕事を手伝ったりしているが、「孫、會孫の成長が楽しんだ。」という葛西さんは、去年夫の磯吉さんが米寿を迎えている長生き夫婦でもある。



上三和局長から記念品をうける泰さん
下長生き夫婦の葛西さん

時代には生き抜いてきた社会の功労者です。

泰ミヤさんは、少し耳が遠くなったが病状はなく、いまも新聞に目をとおすのが日課のひとつ。